このドルオタ、祝福されちゃうってよ

スペシャル

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

１つ思いつきで作ったため続くかどうかわからない
２つ一様歴史改変が起こっているがタイムジャッカーは出てこない
３つこんなオーズみたいなことしてるけどグリスしか出ないはず！
てなわけでよろしく!!

目次

プロフィール（ネタバレ）――1
ゼロ度の炎――7
ドルオタ転生！――15
ベストマッチの出会い――21
決められたロード――25
危ないパーティ――28
厨二のウィザードがやってくる――32
クルセイダーはあてれない！――43
それぞれのアイデンティティー――53

プロフィール（ネタバレ）

猿渡一海

ビルド本編とほぼ同じ

仮面ライダーグリス

■身長：２０３．０ｃｍ

■体重：１１８．３ｋｇ

■パンチ力：３４．３ｔ

■キック力：３９．３ｔ

■ジャンプ力：５６．０ｍ（ひと跳び）

■走力：２．０秒（１００ｍ）

★必殺技：スクラップフィニッシュ

説明

第一話

６．７歳の頃から自分がグリスになり戦う夢を見るようになる。１０歳になると今だ続く夢に不安を抱き鍛えることに。そこからはビルド本編とほぼ同じだが三羽ガラ

スを守りきり最後にはエボルトを瀕死にまで追い込むという活躍を見せた…

第二話

目を覚すと見覚えの無いところにいることに気づく。女神エリスに天界だと言われ混乱するも魔王討伐を頼まれ、ＬＯＶＥ＆ＰＥＡＣＥのためにまた戦うことを決意し人間強化という特典をもらい転生する。

第三話

目覚めると街に立っておりギルドを目指すも迷子になる。そこでジャイアントトードに襲われている２人組を見つけ助け出し、ギルドまでの案内をしてもらうのだった。

第四話

ギルドについたカズマ達…カズマどうにかして絶対に戦力となるカズミンを仲間に入れようとする。最終的に仲間になりカズミンは冒険者登録に向かうのだった

第五話

カズミンは職業「冒険者」になった。これから冒険が始まる…のではなくジャイアント・トードとの戦い！カズミンは自分のパーティがどれだけ危ないのか思い知らされるのだった

第六話

かずみん達は仲間を増やすことにしたそこに来たのはアークウィザードのめぐみん

…かずみんは仲間になれるかどうか試験を与えることにした…

第七話

かずみんはクルセイダーのダクネスと盗賊のクリスと出会う。‥盗賊のクリスはスキルを教えてくれるということでかずみんとカズマは盗賊スキルを覚えるのだった

第八話

突如緊急クエストが起こり驚くかずみん。しかしその内容は空飛ぶキャベツとりだった!キャベツを取っているとキャベツに体当たりされ傷ついている人を見つける。かずみんは助けに行こうとするが…

設定

第一話

「ゼロ度の炎」

ビルド本編のゼロ度の炎は感動しましたが、グリスブリザードとエボルの戦いが見たかったのでここで実現させよう!と思い書いたのがこの第一話。この話では出来るだけ、カズミンを活躍させたかったので、おいしいところは全部持ってかせました。

第二話

「ドルオタ覚醒」

ここでキャラ設定をちょっといじりました。初期設定はカズミンに憑依した主人公だったので第一話の話になった。という感じにしようと思いましたが、カズミンが本編を知ってればいいということに気づき、憑依から予知夢に変更しました。ちなみに予知夢は本編だけなのでこれからは使わないと思います

第三話

「ベストマッチの出会い」

第三話でカズマとアクアと合うようにするのは決めていたのですが出会い方がわからず結構考えました。カズミンが方向音痴であることを思い出し、これを使ってみよう！と思い書くことにしました。ボトルは正直適当に選びました。もしかしたらボトルを帰るかもしれません。ボトルよりブリザードナックルの方がこれから活躍しそうですけどゴリラは絶対に活躍させます。

第四話

「決められたロード」

とりあえず今回で仲間にさせようというのが第四話の目的なので話がそこまで進んでいません。次にカズミン視点を行うために短くまとめたので次回は結構長くなると思います。

第五話

「危ないパーティ」
　今回やっと冒険者に出来ました…長くなると言いながら１０００文字程度で終わらせてしまった…すみません！ちなみに今のカズミンはエボルトの無理した戦いで弱っています（本編では次ぐらいにふれるかも）
　第六話
「厨二のウィザードがやってくる」
　とりあえずめぐみん登場しましたね…それにかずみんが変身しない理由がとりあえず明かされました…量より質って部分はビルド本編見てて本当に思ってしまって…エボルト本当に強すぎる…ちなみに最後に見てた人物はダクネスです…
　第七話
「クルセイダーはあてれない！」
　ダクネス登場！本来ならこの話でダクネスを仲間にする予定でしたが、なかなか考えがまとまらず…キャベツまでいけませんでした。かずみんにスティールを覚えさせる時はカズミンにパンツを取らせようか迷いましたが止める役にすることにしました…ちなみに変身は確実にさせる予定ですがするのはまだまだ先となっています
　第八話
「それぞれのアイデンティティー」

ここの話は出来るだけダクネスを活躍させるように書きました。正直いろんな案を考えましたがダクネスを活躍させる感じはあれしか思い浮かびませんでした。それと今回は題名もどうするかとかなり考えました。最初はキャベツがフライとか意味わかんない題名になってしまって…そこからビルド本編の題名を見てアイデンティティーが使えると考えてこういう題名になりました。

予定（やるかどうかはわからない。理由があるのはほぼやる）

冬将軍といい勝負をさせたい

ヒロインはアンケートを参考に決める。

ヒロインなしの場合

戦闘メインだがちょっとのイチャイチャはあるかも

ヒロインがいたらのアナザーストーリーも描くかもしれない

ゼロ度の炎

あらすじ

あらゆる惑星を吸収して自らのエネルギーに変えてきたエボルトはついに地球殲滅を宣言する。エボルトの目的は１０本のロストボトル集めてワームホールを完成させより多くの惑星を滅ぼすことだった。それに立ち向かうべく俺たち仮面ライダーは戦いを挑むがやられてしまう。その時現れたのは三羽ガラスの擬態との戦いに勝利した…猿渡一海、仮面ライダーグリスだった。

「‥俺抜きで何楽しんでんだ‥ゴラァ‥」

「カズミン!?」

「フッ‥何かと思えばグリスか、言っておくが、今のお前じゃあ、俺を倒すどころかダメージを与えることもできないぞ。」

グリスは擬態との戦いで相当の負傷していた。

「んなこと‥やってみなきゃ‥わかんねぇだろが!!」

「フハハハ‥それじゃせいぜい楽しませてくれよ?」

「うるせぇ!!」
　グリスは殴りにいくがすぐにかわされカウンターを喰らい吹っ飛ばされる。
「ガァ!!」
「おいおい、どうした‥?」
「くっ!」
　グリスはエボルトから距離をとりツインブレイカーにボトルをセットする
シングル!!?‥‥ツイン!!?
「喰らいやがれぇぇぇ」
ツインフィニッシュ!!?
　ドガオォォン
　ツインフィニッシュが当たるがエボルトは何事もなかったように立っていた
「やはりこの程度か‥」
「なっ‥しまっ」
「もう遅い‥フッ!ハッ!ダァァ!」
　一気にエボルトの攻撃をくらって変身は解除されてしまった。
「勝負有りだな‥」
「まだだ‥」

「‥いい加減に諦めたらどうだ？」
「‥俺たち仮面ライダーはな‥大勢の願いを背負ってたたかってんだ!!諦めるなんて感情はな‥とうの昔に捨ててんだよぉぉぉーーーッ!!」
そう言い立ち上がったグリスはビルドドライバーを持っていた。
「ッ！カズミンやめろ!!」
「悪りぃな‥戦兎‥約束‥破るわ」
一海はビルドドライバーを装着してブリザードナックルにボトルを入れた。
ボトルキーン!!？
グリスブリザード!!？
レバーを回していると後ろからナックルと同じ形の機械が出てくる
Ａｒｅ　Ｙｏｕ　Ｒｅａｄｙ？
「できてるよ」
激凍心火！グリスブリザード！ガキガキガキガキガキガッキーン！
「‥心火を燃やしてぶっ潰す」
「…最後の最後まで抵抗するというわけか。」
「いくぞゴラァァァーーーッ!!」
「…こい」

グリスはエボルトに殴りかかる。
「…おい…戦兎…約束ってどういうことだ…」
「…カズミンの今の体じゃグリスブリザードになったらもう…」
「おい…まだ助かるんだよな!!」
「…どうにもならない」
「…ふざけんな!!なんでそんなもん作ったんだ!!」
「やめろ万丈…葛城だって変身させるつもりじゃなかったはずだ。」
「…ウグッ…こんな時だったのに体が動かなねぇ…」
戦兎、玄徳、龍我はとても戦える状態じゃなかった。
「なるほど。さっきとは比べ物にならないほどにハザードレベルが上がっているな。だが…フッ!!」
「グッ!!」
グリスはエボルトの攻撃によって少しよろけてしまい、立て直すものの体からは光の粒子がでていた。
「やはりな…ネビュラガスを限界まで入れられているお前ではグリスブリザードは諸刃の剣というわけだな…」
「なぁに…俺一人が死ぬぐらいでお前を倒せるんだ…安いもんだろ!!」

「フッ俺を倒す？残念だが…それでも俺には及ばない!!」
　エボルトとグリスの差は歴然だった。
「例え力の差が歴然だとしても、俺達は戦うんだよ!!」
　グリスの攻撃でエボルトはダメージを受ける
「グハッ」
「何…ハザードレベルが急上昇していく…ならば」
レディゴー
ブラックホールフィニッシュ　チャオ
　エボルトの必殺技はグリスに直撃するがそれでもグリスは立っていた
「何!!」
「足りねぇな…全然足りねぇな…誰が俺を満たしてくれるんだよぉーーーッ!!」
シングルアイス!!
レディゴー
グレイシャルアタック!!
　ドゴーン
「ガァ!!」
「…なにっ!!体が動かない」

グレイシャルアタックはエボルトリガーに直撃しエボルトの動きを止めた
「ハァハァ…そろそろ潮時みてぇだな…」
グリスの体は光っており今にも消えそうになっていた。
「戦兎…最後のロストボトルだ!!」
そう言ってグリスは戦兎に投げる
「…お前、このために!」
今までグリスはロストボトルを刺した状態で戦っていた
「戦兎、龍我、ヒゲ、さわさん、みーたん、お前達のせいでだいぶ未練が残っちまった…ありがとな…」
「ＬＯＶＥ＆ａｍｐ；ＰＥＡＣＥを胸に生きていける世界を……向こうで祈ってるぞ…心火を燃やして!」
そう言ってレバーを回す。
シングルアイス!!
「死闘!渾身!全霊!」
ツインアイス!!
「これが最後の祭りだぁぁぁーーーッ!!」
グレイシャルフィニッシュ!!

「うおぉぉりぁぁぁぁぁぁ!!」
「そんな馬鹿な!! 人間如きに!!」
　バァーーン
　エボルトは実態はあるものの完全に動けなくなっていた
「ハァハァ…」
　グリスも変身が解けていた
「グリス‼?」
　そこに美空が駆けよる
「みーたん!…俺のために泣いてくれるなんて嬉しいねぇ…」
「…グリス」
「…最後までグリスかよ…」
「当たり前でしょ…呼んだらいなくなる気がして呼べなかった…」
「…これからも絶対呼んであげないんだから…」
「…それじゃあ、逝ってくる」
　美空が一海の服をつかむ
「生きてよ…だから生きてよ…お願いだから…生きてよ!!」
「推しに看取ってもらえるなんて…幸せもんだなぁ…俺は」

一海最後に笑って消えていった…

ドルオタ転生！

あらすじ

仮面ライダーグリスことこの俺、猿渡一海はエボルトを倒すことに成功！しかし力尽き消えてしまうのであった。

カシラ，ついにやりましたね！

おう！この後は生き返ってみーたんとのラブストーリードルオタ推しと付き合うってよが始まるぞ！

それはありません!!こんなカシラですが皆さんよろしくお願いします

それでは第二話どうぞ!!

運命を変えるには運命を知らなければならない…

…俺は6歳，7歳ぐらいのころ，毎回，自分が仮面ライダーグリスになって戦う夢を見るようになった。

夢以外には特に何も起きなかったためとりあえず普通に暮らしていた。しかしその時から妙な胸騒ぎがしていた。

俺はその夢が１０歳になっていまだに続いているのを疑問に思い、もしかしたらのために鍛えることにした。
まるで話を見ているかのような夢だ。終わったら巻き戻る…
しかもこの夢は現実になるということを突き付けるかのように俺の身の回りには夢に出てきたものがどんどん出てくる
決めてはみーたんとの出合い
話すと長くなるので話さないがその出合いで俺の生活は変わった。
前より鍛えるようになり。疲れた時にみーたんの動画を見る。そうすることにより、とても頑張ることができる。
それを続け、ついに夢の内容が現実となる頃には覚悟を決め戦うことを決意した。
ずっと鍛えてたおかげか、運命を知ってたおかげか、夢よりもだいぶ戦えるようになっており、修也、聖吉、勝、を助けることができた。
結局最後に俺は消えてしまったが、大事なものは守れた。
未練はあるが悔いはなかった。
「そんな話が…」
そう…そんな話があったんだよ…ん？
なんで聞こえてるんだ？

「なんでって一人でずっと喋ってたじゃないですか！」
「マジで!?…てかあんた誰？」
「それはこっちのセリフです！仕事が終わったと思ったら急にあなたが出てきたんですから」
「あれ？俺は確かエボルトとの戦いで死んだんだよな…ここが新世界の訳もないし」
「本当にあなた何者なんですか？」
「ああ…俺は猿渡一海，農家をやっている」
「そういう訳じゃなくてですね。何でここに来れるんですか？」
「なんでってそもそもここどこなんだよ」
「どこってここは天界です」
「天界…ああ俺は死んだからにしても天界って本当にあるんだなぁ」
「てことはあんたは閻魔様ってことか？」
「違います！女神エリスです！」
「女神エリス？」
「はい」
　聞いたことない神だな。まあ神なんて俺知らないし、知らなくて当然なんだけど
「それとここは確かに死んでしまった人が来る場所ですが，あなたの魂が来る予定はな

いんです。」
「…つまり俺がここにいるのはそのエリス様が呼んできたわけではないと」
「そうです！」
　どういうことだ？もしかして、新世界を創った影響で消えた俺の魂がここまで運ばれてきたとかないよな？
　どちらにしろ、これからどうなるんだ？
「んで，これから俺ってどうなるだ？」
「そうですねぇ…まあ，転生者が増えるのもメリットが多いでしょうし…仕方ありませんね」
「どうにかなるっぽいな」
「今からあなたには３つの選択肢を選んでもらいます。」
「３つ？…まあわかった…それでどういうのだ？」
　もしかして天国，地獄，大地獄的な…んなわけないなこんな馬鹿なこと考えるのは龍我だけでいい
「１つ目は天国に行ってもらうこと」
　天国！あながち今の考え間違ってないのか？
「２つ目は新しい人生を送ってもらいます」

…人生やり直しか…別に悔いは残ってないしここは天国かな
「3つ目なのですが…ＲＰＧはお好きですか？」
…は？ＲＰＧってゲームの？別に興味はないな…
「好きではないがそれと何の関係が？」
「3つ目、なのですが…魔王を討伐するために異世界に転生していただくことなのです」
…急にぶっ飛んだ話がきたな…まあ、火星の王妃や地球外生命体よりはインパクトにかけるけどな
「それを毎回、ここに来る人に聞いてんの？」
「まあ…そうですね…」
「魔王か…」
ＬＯＶＥ　＆ａｍｐ；　ＰＥＡＣＥ　を望む俺からしたらほっとけないな…
「決めた…3つ目だ」
「…わかりました。それでは特典を選んでください…」
「…特典？」
「はい。魔王はとても手強いので特典を選んでもらいそれで戦ってもらいます」
「…なるほど」
　というわけで特典を何個か見たが俺にはどれが強いとか全くわからなかった。

「あーもうこれでいいわ」
　俺は勘で適当に選んだ。そもそも変身できる俺にはどれもいらないものばかりだ
「人間強化ですか？」
「ああ」
「あまりオススメはできませんがよろしいんですか？」
「いいから、俺はこれでいい！」
「わかりました。それでは猿渡一海さん、必要なお金です」
「おお、ありがとう。」
　そうすると、俺の下から変な文字が浮かび上がってきた。そして俺の体はみるみる上に上がっていく
　エリスは何かを言っていたが変な文字や自分の体が浮いているとかでそれどころじゃなかった
　そして俺は異世界へといった

ベストマッチの出会い

あらすじ

仮面ライダーグリスことこの俺、猿渡一海は女神エリスの話ののちに異世界に転生するのだった‼?

そういえば、転生ってなんかデメリットとかなかったのか?そこんとこどうなの?…エリス様?

…あー……

…あ?あってなに?…お前もしかして伝え忘…

さ、さあそこのところもふくめてどうなる第三話‼?

話聞けよ!!

目覚めると街の道に俺は立っていた…

「…本当に生き返ったのか…」

「…ていうかここからどうすればいいんだっけ…」

エリスは仕事の疲れやその時は急いでいたため説明をすっかり忘れていたのだった

「とりあえず…こういうのは確かギルドに行けばいいんだよな?」
俺は街の人にギルドの道を聞き進んで行った
…2時間後…
「…ここ、どこだ…」
俺は平野にいた…迷子になったのだ
「道を案内してもらうべきだったな…」
「…とりあえず、人を探すか…」
「おーい…誰かいないかー…」
声を出しても反応はなかった
それから長い時間歩いているとと遠くに緑のでかい何かが見えた
「…なんだ…あれ…」
近づいてみると大きなカエルであることがわかった…
「…流石は異世界…ぶっ飛んでるな…」
さらにそのカエルに人が2人襲われているのが見えた…
「これは助けにいかないと…ボトルは何持ってるんだだけ」
俺が所持しているボトルはバラ、消防車、フェニックス、キー、ダイヤモンド、ゴリラの6つ…

「…とりあえずゴリラでいいか…」
俺はゴリラを持ちカエルの方に向かった
「…あ!…青髪のやつ食われた!…」
俺は急いでカエルのところに向かいボトルを振ってカエルを殴った
しかし、ボヨンと音が鳴っただけでダメージは与えられなかった
カエルは青髪を吐き出し標的が俺に変わった
突然舌を俺の方に飛ばしてきたがなんとか避けることができた
「…あっぶねぇ…」
「ボトルが効かないならこれだな」
俺はブリザードナックルを出しすぐにボトルを入れた
ボトルキーン
「くらえ!!」
グレイシャルナックル　ガチガチガチガチガッチーン
カエルは凍っていき最後には砕けた
俺はすぐに青髪の方に向かった
「おい…大丈夫か?」
「…ヘッグ…ありがとう…」

「…どういたしまして…」
　青髪は泣きながらお礼を言ってきた。するともう一人の少年も駆け寄ってきた
「あんた、すごいな…」
「まあ、鍛えてるからな…あ！お前らギルドの場所ってわかるか？」
「…ああ…よし、あんたには助けてもらったお礼もしたいし、ギルドまで連れてっていくよ。ほら、いくぞ駄女神」
「…うん…」
「おお、じゃあ頼む」
　こうしてギルドに連れてってもらうのだった
　そしてこれからこの俺、猿渡一海の波乱万丈な生活が始まろうとしていた。

決められたロード

あらすじ

仮面ライダーグリスこと猿渡一海はカエルに襲われてる2人組を助け、迷子になってる2人をギルドに連れてっていくのだった…

嘘言ってんじゃねぇよ！迷子になってたのあんただろ！

そこは言わないところだろ！…てか何回言ったらわかるんだ？俺のことはカズミンって呼べよ！

やだわ！なんでいい歳したおじさんをニックネームで呼ばなきゃならないんだよ!!

おい…誰がおじさんだ…まだまだお兄さんだろうが！

２０代後半はもうおじさんだろ！てかこのまま話してたら本編行けないぞ！

ああ！そうだった…それでは第四話どうぞ！

どうも、皆さんカズマです。さっきまで駄女神を特典にしてしまった事を悔やんでいたけど、目の前には多分俺と同じ日本人がいる…しかも、ジャイアントトードを生身で倒せる特典を持っている。いやー幸運高いなんて疑ってたけどついてるぞ！後は仲間

に入れるだけ
「ん？俺のこと見てるけど、顔に何かついてるか？」
「ん？いやー…なんでもないです」
　よし！まず自己紹介、次に自分も日本人である事を伝えて、さりげなく仲間にならないか伝える…完璧だ！
「あの…「あなた日本人よね！」あ！」
「ああ…そうだけど…」
　アクアが話に入ってきた…
　やばい…うちには駄女神がいるんだった。まだ性格とかは知られてないから大丈夫そうだがこれ以上喋らせちゃまずい！
「やっぱりそうでしたか！実は俺もそうなんです！」
「そうなのか！…確かにお前だけ服が違うな…」
　よし！こっちに注目している。順序が逆になったが次に自己紹介だ…
「そうなんです…ああそうだ！自己紹介忘れてました！俺、佐藤和真って言います。それでこっちがアクアって言います」
「次は俺だな…俺の名前は猿渡一海…前は農家をやってた…敬語は使わなくていいぞ。愛称はカズミンだ！」

「…わかった！一海よろしくな。」
カズミン…呼びたくねぇ…とりあえず後はさりげなく仲間を募集してますよ的なことを言えばいけるはず…
「そうだわ。カズミン、あなたの力とてもすごいと思うの…だから仲間にならない？」
おい！そんなドストレートに言うな駄女神…ただでさえさっきの状況見られて入ってくれるかわからないんだから謙虚にいかなきゃ駄目だろ！…ああもう乗るしかない
「そうだな！ちょうどメンバー募集中だったからな…」
すると一海は考え込んだ…
「…いいのか？俺はまだ冒険者にもなってないんだぞ？」
…あれ？結構いい感じだぞ？
「…俺もあんたも魔王討伐という同じ目的があるだろ？それに俺らじゃ到底勝てそうにない…あんたの力が必要なんだ」
どうだ！嘘は何も言ってないぞ。
「…そこまで言われちゃ仕方ないな…よろしく頼むぜカズマ…」
よし!!これはアクアに感謝しなきゃな…
「それじゃあ、俺は冒険者登録してくるわ」
そうして一海は登録しにいった。

危ないパーティ

あらすじ
仮面ライダーグリスこと猿渡一海はギルドに行きカズマと仲間になるのだった！
てかあんなに簡単に仲間になってよかったのかよ！
いやいや…俺は人の見る目はある方だからな、それにまだまだ理由はあるぞ！
理由ってなんだよ！
それは第五話を見ればわかるからな…それではどうぞ！

俺は今、少年達によってギルドまで来ることができた。
さっき、少年の方が俺のことずっと見ているのが気になっていたが気のせいだった。
「あなた日本人よね！」
青髪が聞いてきたので俺はそうだと答えた！すると少年の方もそうなんだとか…
青髪はとても髪の色がおかしいが、染めでもしたのだろうか…
そのあとすぐに自己紹介となった。

少年はカズマ、青髪はアクア、という名前だった…俺も自己紹介をしたが、カズミンと呼んでくれたアクアだけでカズマは一海と呼んでいる。
仲間になってくれとアクアに言われた時正直断るつもりだったがよく聞いてみるとアクアはベルナージュに声が似てることに気づいた。それにどこか三羽と似てるところがある‥これも何かの縁だと思い、仲間になることにした
そして今まさに俺は冒険者登録をしようとしているところなのだった（今ここ！）
一通りの説明は聞いたがまあステータスが分からなきゃどうしようもないな！
「それでは水晶に触ってください」
「はい」
水晶に手をやると紙にどんどん文字が描かれていく
おお…すげぇ…
「おお！これは！」
受付の女性は驚いている
「全ステータスが平均よりやや上回っていますね！」
ややか…どうやらハザードレベルは測れないみたいだな…
「どの職業ならいけますかね？」
「これなら上級職は無理ですが、他の職ならなんでもいけますよ」

なるほど…どれも俺と合わないやつばっかだな…お？冒険者…これにしよ！
「この冒険者ってのでお願いします。」
「え？本当によろしいのですか？」
うん？なんか反応がおかしいぞ？能力が微妙なのか？
「冒険者ってどんな職業なんですか？」
「全ての職業の技を使うことができますが本職より劣っており職業の中でも一番下の職業です」
なるほど…まあ…他の技使えるし、問題ないだろ…
「これでお願いします」
「！わかりました…」
こうして俺の冒険者生活が始まるのだった！

今俺はカエルと戦っているのだが…
「うわぁぁぁぁ助けてぇぇ！」
カエルと鬼ごっこ（リアル）しているカズマ
「ちょっと待ってろ！っアっブねぇ」
カエルと戦っている俺

「ウプククククク」

食べられているアクア

…これは結構ヤバイかもしれない

厨二のウィザードがやってくる

仮面ライダーグリスこと猿渡一海は職業で冒険者を選ぶ。そしてクエストを受けるも、自分のパーティの危険さを知ることになるのだった

おい！思ってたより数倍やばいじゃないか！戦力俺だけってどういうことだよ！

仕方ないだろ！俺何の能力も持ってないんだから！

アクアはカエルに食べられるし

プククククク

：まあとにかくこのままじゃダメだな：よし決めた！

ん？何を決めたんだ？

それは第六話でのお楽しみ！それではどうぞ

「仲間を募集する」

俺はアクアとカズマの前でそう言った

正直さっきのクエストでは俺以外全く戦えていなかった：変身すれば全然守り切れるが仮面ライダーは兵器：仮にこの世界で仮面ライダーを作ることができるなら戦争

が起こってしまう…ネビュラガスもないとは言い切れない…だから出来るだけ変身は控えなければならない

「でも…募集ったってどうするんだ？」

「簡単だろ…俺たちに足りないのは遠距離攻撃ができる奴とうまくアクアとかを守れる奴…そいつらを募集していく。」

そう、今の俺たちのパーティには攻撃役と回復役と頭脳役しかいない。パッと見るといいパーティだが、敵が複数だった場合、アクアとカズマはやられてしまう。そこで募集することにした。

「ちなみにアクア…俺が言ったことができる職は何がある？」

「そうねぇ…遠距離攻撃はアークウィザードなどが得意としているわね…守りはクルセイダーがいいんじゃない？」

「おお…たまには役に立つな…！」

「たまにはってどういうことよ！」

「だけど…大丈夫なのか？二つとも上級職だぞ？」

「大丈夫よ…私がいるんだもの。むしろパーティに入れてくださいってお願いしてくるわよ」

アクアがこれだけ自信満々に言っているんだ大丈夫だろう

俺はアクアとカズマに大体のことを話ギルドから出た
そういえば俺が話していた時カズマが不安そうな顔をしているように見えたが気のせいだろう

募集してから半日がたったが今だに来る人はいない。
「アクア・・ほんとに来るのか？」
カズマが疑いの目を向けてアクアに言う
「・・・来るわよ」
アクアは自信なさげにそう言った
やはり上級職はレベルが高かったか・・そう思いレベルを下げようと提案しようとした時
「募集の張り紙見させてもらいました。」
１人の少女が話しかけてきた。
「お、おう」
「我が名はめぐみん！・アークウィザードにして最強魔法・・爆発魔法を操るもの！」
・・なかなかすごい奴がきたな・・決め台詞にあだ名・・なら俺も！

「よろしくなめぐみん・・俺の名はかずみん。心火を燃やしてよろしくな！そしてこいつがカズマでもう1人がアクアだ」
　こっちも俺流の名乗りだ！
「よろしくね！」
「いや、ちょっと待って！」
　カズマはそう言って俺だけに聞こえる声で話しだした
「アクアはともかくなんで一海まで平然としてんの!?」
「いや、別にあだ名で名乗っても問題ないだろ？それとカズミンって呼べ」
「絶対呼ばない！いやそこじゃなくて、名乗り方がおかしいだろ！」
「生憎、あれよりすごい名乗りを仲間がするんでね！こっちはまだ可愛い方だぜ？」
「・・マジか」
　戦兎とか・・三馬鹿とかもそうだな・・そう考えると悪い意味でも戦兎たちに毒されてるな
「何を話してるんですか？」
「いや・・関係ないことだ・・」
「で、本名はなんていうんだ？」
「・・めぐみんです・・」

「「え？」」
「私の名前に文句があるなら言ってもらおうか！大体かずみんだって私と同じような名前でしょう！」
「あーそれ俺のあだ名：本名は猿渡一海だ：悪かったな：ちょっと珍しい名前だったからあだ名と間違えただけだ：」
「：そういうことですか：大体私からすればあなた達の方が変な名前ですよ！かずみんというのは結構センスがありますけど：」
　そう言っているめぐみんはいつの間にか目を赤く光らせていた
「その目：あなた紅魔族？」
「ええ…そうですけど……」
「アクア：その紅魔族ってのは何だ？」
「そんな事も知らないの？ハァ：なーんにも知らないカズマにおしえてあげる」
「お前が説明しなかったからだろうが！」
「紅魔族という魔法などがとても優秀な種族でアークウィザードや変な名前の人が多いの」
「変な名前とはなんですか！」
　え：じゃあ紅魔族に認められたかずみんって変な名前なの？：

「まあまあ‥そういえば爆裂魔法っての覚えてるって言ってたよな?」
「そうです!我が爆裂魔法は山をも崩し岩を‥も‥く‥だく‥」バタ
「お‥おい大丈夫か!」
倒れためぐみんのところに行くと
「もう3日も何も食べて無いのです‥何か食べさせてもらえませんか?」
「‥ああ」
なんでこうクセのある奴ばかりなのだろうか‥

「なるほど‥魔力とかかが高いのか‥」
‥アークウィザードだし当たり前か‥しかし爆裂魔法か‥なんかどっかで聞いたことあると思ったらクローズマグマの爆裂筋肉だ‥どうしてこう似たやつが集まってくるのか‥
「そういえば‥その眼帯どうした?‥怪我してるならアクアに直してもらえ‥こいつ回復魔法だけは使えるから」
「回復魔法だけって何よ!」
‥また喧嘩してる‥くだらないことで喧嘩するのも龍我と戦兎を思い出すな‥
「フフ‥これは我が闇の力を抑えるマジックアイテム‥これが外された時には世に混乱

を巻き起こすだろう・・」
「封印ってやつか・・・！」
・・え？マジで！これはめちゃくちゃ強いやつだ！だけどありえるのか？・・・いや宇宙外生命体があるぐらいだし普通にありえるのか・・・
「ま・・嘘ですけど・・・ただかっこよくて付けてるだけ・・・」
「「・・・・・・・・」」
俺はめぐみんの眼帯を出来るだけ引っ張った
「あ！引っ張らないでください！やっやめろー！」
「アクア・・・紅魔族って本当に優秀なやつらしかいないんだよな・・・」
カズマがアクアに聞いた
「それはどういう意味で」バチーン「イッタイメガー！」
「あ・・悪い・・・大丈夫か？」
「・・・痛いです・・・」
動くので手が滑ってしまった・・・やっておいてなんだかすごく痛そう・・・
「まあ・・・とりあえずめぐみんには試験を受けてもらう」
「え？」
「なに・・・ちょっとしたクエスト受けるだけだ・・・」

「…はい…わかりました」
なんかすごく不安そうな顔してるけど…気のせいか？
とりあえず俺はクエストを受けに行った

「よし！じゃあ打てる魔法を撃ってみてくれ…」
「はい…わかりました！ちなみに我が爆裂魔法は結構時間がかかるので足止めをお願いします。」
「わかった…いくぞ！カズマ！アク…アクアどこに行った？」
「…自らの身を使って足止めしてる…」
そう言っているカズマの視線は食べられているアクアの方に向いていた
「…またか…とりあえずカズマいくぞ！」
「ああ！」
そこからなんとかカズマと俺でカエルの足止めをしているとめぐみんが呪文的なのを唱え終えた
「離れてください！」
「わかった！」
エクスプロージョン!!

ドカーン!!
　その威力はものすごいものだった…カエルは吹き飛び大きなクレーターができていた…
「すげぇ…これならいける!」
　遠距離攻撃でここまで威力が高いとは…俺も覚えてみようかな…
　すると今の衝撃で起きたのかカエルがどんどん湧いてきた
「うお…ヤバ…めぐみん逃げる…ぞ?」
　カズマの様子がおかしいと思い視線を見てみるとめぐみんを見てみると倒れていた…
「我が爆裂魔法はその破壊力ゆえにとてつもない魔力を使います…要するに一回撃つと動けません…」
「ええ…」
「助けてください…」
「ちょっと待ってろ!」
　あいつらには打撃はあまり効かない…フルボトルはフェニックスとダイヤモンドでいってみるか…

「あ…やばいです！もう目の前に！」
「オラ！」
俺のパンチがカエルに当たり吹っ飛ぶ…
「前みたいにいくと思うなよ！」
俺はボトルを振り…右手は炎…左はダイヤで殴り続ける
流石にカエルは倒れた…
アクアの方もカズマが助け出したらしく
とりあえずクエストは終了した

俺はめぐみん…カズマはアクアをおんぶしながら帰ってきている…
「次は違う魔法を使ってくれ」
カズマがそんなこと言った
「出来ません」
「え？」
「出来ないんです！…私は爆裂だったらなんでもいいわけじゃないんです…爆裂魔法じゃなきゃダメなんです！」
「まあ…いいんじゃねぇか…一個のことを頑張るってのもなかなか出来るもんじゃない

しな…すげぇよ！」
「かずみん…！」
「一海！」
「まあまあ…考えてみろ…あれだけの破壊力だぞ…カズマ…世の中は量より質だ…それとかずみんな！」
　エボルトとの戦いがいい例だ…4人がかりでも全く歯がたたなかったんだ。数が多ければいいってもんじゃない…
「まあ一理あるか…てか呼ばないって言ったんだろ…しつこいわ！」
「とゆうことでよろしくな！」
「え？いいんですか？」
　めちゃくちゃ驚いてる…これは他のところでも追い出された感じか？まあいいや
「ああ！…それとあの爆裂魔法ってやつ後で教えてくれ」
　やっぱり魔法とかは使ってみたいよな‥
「…やはりかずみんとはセンスが合うようですね…」
「そんなことはないとは思うが…」
　こうして1日が終わった…何者かにみられていると知らずに…

クルセイダーはあてれない！

あらすじ

仮面ライダーグリスこと猿渡一海は自分のパティーのもろさを知り仲間を募集する：そこに現れたのはアークウィザードのめぐみんという少女だった：一海から与えられた試験を挑み認められためぐみんは一海達の仲間になるのだった

にしてもアークウィザードがこんな速く仲間になるとわな：次はクルセイダーだ！

そう簡単にはいきそうにないな：

：案外、近くにいるかもよ？なんか視線感じてたし：

え？なにそれ、怖！絶対クルセイダーじゃないだろ！なんでわかるんだよ！

俺の　第　六　感　だ！

いやいやそんなのでわかるわけないだろ！

よし！じゃあもしクルセイダーだったら俺のことかずみんって呼べよ！

わかった！でもクルセイダーじゃなかったら絶対呼ばないからな！

それでは第七話どうぞ！

「ちょっといいか？」
　俺とカズマが話していると女性が話かけてきた‥
「私はダクネス‥クルセイダーを生業としている者だ‥ぜひ私をパーティーに入れてくれないか？」
　え！嘘だろ？‥こんなドンピシャな事あるのか？
「それとあのヌルヌルの女性はあなた達の仲間だろ？一体何があったらあんなめに？」
　あ！‥やばいとこ見られてた‥てかあの視線本当にクルセイダーだのか‥
　‥カズマも同じことを考えたらしい‥カズマ約束忘れんなよ！
「いやあれはジャイアント・トードに食べられてしまって‥」
「な！‥想像以上だ‥」
　え？何？想像以上って‥一体何考えてんだ？
「いや‥女性をあんなにヌルヌルにするなんて‥騎士として見過ごせない‥ハァハァ‥」
　息荒くなってんだけど‥確実にやばいやつだ‥
「いやいや‥こんな弱小パーティーおすすめしませんよ‥そのせいでヌルヌルになったんですし‥最悪あなたも被害が出ると悪いので‥」
　カズマが焦りながらそういう‥どうやらカズマも仲間にするのは気が向かないらし

い‥遠回しに断った‥
「ヌルヌル‥ハァハァ‥構わない！」
ダメだったー‥むしろ俄然やる気出してるな‥
「むしろよかった‥」
「え？」
「私は力と防御力には自信があるのだが‥不器用で‥敵に攻撃が全く当たらないんだ‥」
それ不器用とかそんな次元じゃないだろ！
「というわけでガンガン前に向かうので‥盾がわりに使って欲しい」
さてどうするか‥とりあえず‥ここは用事があると言って逃げよう‥
「すまない‥これから用事があるから‥いくぞ！カズマ」
「あ‥ああ！」
そう言ってそこをすぐさま去った‥
「‥カズマ‥どう思う？今のクルセイダー‥」
「‥あれは中身もダメなタイプだ‥」
「‥そうだな‥」

ギルドに入るとアクアが新しいスキルを使っていた・・てか冒険者ってどうやってスキル使うんだ？

「カズマ・・冒険者のスキルはどうやったら使えるんだ？」

「俺が知るわけないだろ？・・かずみんより先と言っても数日しか違わないんだから・・」

「それもそうか・・あっそうだ・・」

俺はめぐみんのところに聞きに行った・・

「おい！めぐみん」

「ん？どうかしたんですか？」

「冒険者のスキルってどうやって使えるようになるか教えてくれないか？」

「・・いいですよ！」

「・・まず、誰かにスキルの使い方を教えて貰わなきゃいけません・・そのあとは溜まっているポイント分のスキルを選んで使えるようになります！」

「じゃあ・・爆裂魔法も使えるようになるのか？」

「ええ！それこそかなりのポイントがいりますが使えますよ！使いたいというのなら私が教えてあげますよ！」

「・・よし！こんど教えてくれ！」

「爆裂魔法に興味を持つとは・・やはりかずみんとは気が合いますね！こんどあなたに紅

魔族の名乗り方も教えてあげましょう！」

「‥それはいいかな‥」

俺でもあの爆裂魔法が使えるのか！これで生身の攻撃が効かない奴でもどうにかできる‥やっぱり冒険者にしてよかったかもな‥

「あっいた！」

声がする方を向くと昨日話しかけてきたダクネスと銀髪の女性がいた…

俺はカズマだけを呼び話を進めた

「おい…どうするんだ！」

カズマが聞いてくる…

「昨日考えたが…断ることにした…攻撃が当たらないんじゃどうしようもないからな…」

「そうか…」

カズマは安心したように言った…

「昨日の件だが…」

「すまないが断る！」

「んん！…即断だと！」

ダクネスは喜んでいた…
こいつ…やっぱりMだろ…
「アハハ…駄目だよダクネス…そんな強引に迫っちゃさ…」
銀髪の女性が話してきた…
「アンタは？」
「私はダクネスの友達のクリス…よろしくね…」
「俺は猿渡一海だ…気軽にかずみんって呼んでくれ！」
「俺は佐藤カズマ…よろしく…」
「かずみん…さっきスキルの話をしてたよね？」
「え？してたけど…」
「私の盗賊のスキルはポイントを少ししか使わないからオススメだよ？シュワシュワ一杯で教えてあげる…」
…盗賊のスキルか…試しに覚えてみるのもいいか…
「じゃあ教えて貰おうかな？カズマはどうする？」
「教えてもらうに決まってるだろ！やっとそれっぽいことができる！」
「よし決まりだな！シュワシュワ一杯ください！」

「…という感じで潜伏や敵感知とかいろいろあるけど…私のオススメはこれ！」
「今からやるから見といてね！」
そう言って俺たちに手を向けた…
「スティール！」
そう言うと手が光った！
そして手の中にはカズマの財布と俺のゴリラフルボトルがあった…
「あ！俺の財布！」
「俺のボトルも！」
「スティール…成功すると相手の持ち物を奪うことができるスキルだよ」
「なるほど…確かにすごいな…」
「ねぇ…私と勝負しない？」
「「え？」」
「君達もスティールを覚えて私から自分の物を取り返してみてよ…」
「おい…それはあんまりじゃないか？」
ダクネスがクリスにそう言う…
「君達も冒険者だったら…危ない橋も登ってみなきゃ！」
…生憎俺は前から危ない橋を登ってきてるんだが…まあ…どっちみち…やるしかな

いか…
「わかった…」
「いいぜ！」
　カズマは意外にものる気だった
「それじゃあ冒険者カードからスキルを選んでみて…」
　クリスの言うとうりにスキルを選んだ…
　すると体が少し光ったような気がした…
　カズマも同じようになっていた
「これで盗賊スキルは君のもの！どこからでもどうぞ！」
「大当たりはこのマジックダガー４０万エリスくだらない代物だよ…ハズレはこの小石！」
　…この中から俺のゴリラボトルをとらなきゃいけないのか…自分の運を信じるしかない…最悪カズマがとる可能性だってある！
「いくぞ！」
「ああ！」
「スティール！」
　俺達がそういうと手が光った…

俺は…カズマの財布だった…
しまった！…しかしまだカズマがいる…カズマは？
カズマの方を見ると…え？……パンツ…誰の？
クリスを見ると…顔を赤らめていた…
「当たりも当たり！大当たりだ！」
「いやぁー！パンツ返してぇ！」
…俺は数秒間…状況が読み取れなかった…
「て…何してんだぁ！」
そう言ってカズマからパンツを取り返した…
「…何すんだよ！」
「バカか！…訴えられたらどうすんだ！…」
「いや…今のはは事故だから…」
とりあえずは大丈夫っぽいな…
「あの…パンツ返すからボトルを返してくれ…」
「…わかった…」
こうしてゴリラボトルは戻ってきた…
「…やはり私の目に狂いは無かった！」

そしてダクネスのカズマの好感度は上がった・・

それぞれのアイデンティティー

仮面ライダーグリスことこの俺、猿渡一海はクルセイダーのダクネスに仲間に入れて欲しいと頼まれる。カズマと相談し、断るも隣にいた盗賊、クリスが一海がスキルを欲しいというのを聞いて条件を出すかわりに教えるという話をした事により話はねじれてしまう。条件を受けた一海達は見事、盗賊のスキルを使う事に成功するのだった！

…お前、あれわざとじゃないよな！

いやいや！ランダムって言ってただろ！それに俺はあんな事する度胸はない！

…まあまあ…私は気にしてないんだし、落ち着いて…

…二度と女性にスティールすんなよ！次あんな事あったらうちのパーティーはお終いだからな！

…俺もしたくてやったわけじゃない！

その割にはとっても嬉しそうだったよな！

そりゃあ…仕方ないだろ！俺だって男だぞ！

それはわかるが、あんなに振り回してたら訴えられても何も文句言えないぞ！

…まだ2人の喧嘩は続きそうだな…言っちゃってもいいよね？

…それでは！第八話どうぞ！

俺達はギルドに戻ってきた…
「ランダムで取ったのは仕方ないとしてもその後のすぐに返すべきだっただろ！」
「こっちはあんなのが急に手にあったから頭が混乱しちゃっててあんな事しか出来なかったんだよ！」
俺らはまだ喧嘩をしていた…
「二人ともどうしたんですか？」
するとめぐみんが話かけてきた
「めぐみん！いや…お前には関係ない話だ…」
「…何か引っかかる言い方ですね…」
く…結構鋭いな…
「そ、そんなことより…俺たちスキルを覚えたんだ」
そう言って俺はめぐみんにスティールを使う
「スティール!!」
すると俺の手にはめぐみんが持っていた杖があった
「おお!!すごいですね！」

「そうだろ！…このスキルは色々と使えそうだしな…」

俺は話を誤魔化すことに成功した…と思えたが…

「いや…しかしスティールで女性の下着を剥ぎ取るとは…カズマ…流石私が見込んだ男だ…」

変態クルセイダー（ダークネス）によってそれも水の泡となった…

「え？」

「ちょっお前！」

カズマがはなぜそれを言った！みたいな顔をしていた…同感だ

「しかし！私に同じような事をしようとしてもお前に屈するとは思うなよ…さあ！やるがいい！」

「黙れ！変態クルセイダー!!」

「ンンッ！変態！」

カズマが黙らせるも…時すでに遅し…すでにカズマへの女性達の視線は冷たくなっていた

「いや！スティールはランダムだから…決してわざと取ってしまった訳ではないんだ…」

俺がフォローするも…あまり視線は変わらず庇ったと思われたのか俺にまで冷たい

視線がくることとなった…
あっこれもうダメなやつだ…

あの一件の後とりあえず落ち着いたのでダクネスと話すことにした…
「おい…どうするんだ!…誰かさんのせいでもう誰もここにきてくれないぞ?…目の前のやつを除いてな…」
「悪かったよ…でもアクアですでに大変なのに…これ以上入れちゃダメだろ!」
「…仕方ない…俺はとりあえず、どうやったらパーティーに入ってくれるか考えとくからカズマはダクネスを説得しろ…」
「…わかった」
そんな事を話していると…

緊急クエスト緊急クエスト
冒険者各員は至急正門に集まってください
…緊急クエスト…魔王の手下的な奴でも来るのか?…一様ドライバーを持ってくか…
そうして俺たちは正門に向かった…

冒険者以外は家の中で隠れているようだ…一体何が…
「おい…アクア？今から何が行われるんだ？」
「‥何ってキャベツ狩りに決まってるじゃない‥」
「‥キャベツ？それだけでこんなことなるのか？…大体畑がないじゃないか？」
俺は農家なのでキャベツは当然育てたことがあるが…ここにはキャベツもなければ畑もなかった‥
「‥ああ…かずみんってカズマと同じく何も知らないんだったわね…教えてあげる…この世界のキャベツは飛んでくるの！」
「は？」
ついに頭もやられたか…そう思ったが…すぐにその言葉の意味を理解する…
目の前には大量のキャベツが‥空を飛んでこちらにやってこようとしていた…
「どういうことだ？…」
「キャベツ達は栄養を蓄えると飛ぶの…簡単に食べられないように…そうして山や海を越え最後には誰にも食べられずひっそりと息を引き取るの…それだったら私たちが食べてあげようって事で1匹でも多く捕まえてるの‥
「…なるほど？とりあえずあいつらを捕まえればいいんだな‥」

まだ状況はよくわかってないがここは農家として美味しく捕まえてやろう
そうして俺は捕まえていった！
「オラ！ドラ！まだまだ！」
どんどん捕まえていく…出来るだけ傷つけず…出来るだけ多くとることに専念した
…するとあそこでキャベツにやられそうな人がいた…
「やばい！」
キャベツといえどスピードはなかなかなもの…これ以上当たったら大変だ！
俺は助けに行った…だが

その人の前にある一人の騎士がきた
「あれはダクネス!?」
ダクネスは傷を負っている人の盾になるように前に立ちキャベツの攻撃を受けていた
「大丈夫か!?ここは私に任せろ」
「はい…ありがとうございます」
ダクネスは体当たりによりどんどん傷ついていった
…人を助けるために盾になって守るなんて…結構度胸あるじゃんか…

「あとは俺に任せろ！」
そう言ってダクネスの前に立ち俺はキャベツ達を捕まえていく…
「…オラッ！お前はそいつを安全な場所に連れてけ！」
「…わかった…」
とりあえず、あいつは助かったようだな…
そんな事を思っていると遠くの方で大きな爆発が起きた…
そしてその数分後俺の背中には少女がおぶさっていた…

余談だがダクネスはあの体当たりをまだ受けたりなかったとか…